

## 「学校と地域との協働 ～学社融合で教育コミュニティづくり～ 地域も元気、学校も元気、だからこそ子どもも元気」



日時：平成17年9月8日（木）14：00～16：30

場所：大阪市立中央区民センター ホール

講師：学社融合研究所代表 越田 幸洋

この「講演録」は、当日参加されなかった方にも参加型で体験していただけるよう、当日の講演内容をもとに、講師の越田幸洋さんに加筆修正していただきました。

### 1. はじめに

皆さん、こんにちは。栃木県鹿沼市から参りました越田幸洋と申します。今日は、私が考えてきたこと、実践してきたこととお話しながら、皆さんとワークショップをして、学社融合について一緒に考えていきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。ただし、これから私が話すことは、必ずそうすべきだというのではなく、単なる一つの提案に過ぎません。皆様方自身が判断して、取り入れられるものがあれば取り入れていただきたいと思います。

実は、平成17年の2月19日に行われた「はぐくみネット」の研究発表会を見せていただきました。会場に展示された情報誌を見て、非常に感動しました。「はぐくみネット」の事業報告書にも載っていますが、情報誌の中に赤ちゃんを抱いた小学生の姿がありました。それを見てすごいなあと思いました。木原俊行先生は『「はぐくみネット」というのは、学校と地域が子どものために運命共同体になっていくものとおっしゃっていて、「まさに、赤ちゃんを抱いた小学生の姿が、『はぐくみネット』の一つのゴールになるんじゃないか」とおっしゃっています。

私にも似た経験があります。中学校の技術家庭科に保育の学習があるのですが、学校が困っていたので、一時保育のグループの方とそこに集まってくるお母さん方とでつくっている「子育て広場」の会場を学校へ移してもらいました。そして、家庭科の時間に中学生と乳幼児が遊ぶ機会をつくりました。テレビの取材に、中学3年生は、赤ちゃんを抱きながら、「こういう体験をいかして大人になっていくことがちょっぴり楽しみになりました」と感想を述べました。それを聞いて、私は、今後はこういう学習環境を作っていかなければいけないと思えました。それから十年。学社融合の研究と実践に取り組んでまいりました。

今日はその成果を踏まえ、学校と地域の双方にメリットをもたらす学社融合の魅力と、その可能性についてお話させていただきます。

学社融合の実践は、大きくは二つに分類できます。学校という施設を地域と学校が一緒になって使って地域を豊かにしていくというやり方と、学校の授業を先生方と地域住民が一緒になってやっていく中で子どもたちを豊かにし、地域の力を蓄えていくというやり方の二つです。私は、特に、後者の、学校の授業を地域の方と一緒にやって子どもたちに豊かな学習環境をつくり、学力をつけていくという方向を研究しています。今日の研修には、「はぐくみネット」の力を学校教育に活かす方向性を模索するという目的があります。そこで今日は、地域の力をどう活かせば学校の教育を

さらに豊かにできるかという観点からお話させていただきます。

「はぐくみネット」は、PTAなどの地域の諸団体と、生涯学習ルーム事業や学校体育施設開放事業などの学校を拠点に実施している事業と、学校とのネットワークと伺っています。私は、全国を歩いていますが、大阪市のような教育コミュニティづくりは、珍しい存在です。2月の発表会に参加し、その実践を詳しく伺ったわけですが、大阪市の取り組みは、非常に高いレベルにあると思いました。地域の力を活かして学校の教育を豊かにする取り組みを行うためには、地域にそれを行えるだけの教育力が必要です。地域の中に生涯学習の力がついていなければ、学校を支えることはとてもできません。大阪市の場合は、「はぐくみネット」という形で、その力が養われ、具体的なものとなっています。大阪市には、そして皆さんには、学校教育を豊かにするだけの力が、すでに蓄えられているのです。皆さんが、「よし、やろう」という意欲さえ持っていただければ、皆さんの力を活かした豊かな学校教育活動の創造が始められると思います。

## 2. 学社融合の全国的動向

学社融合は平成8年から実践され始めた新たな教育活動ですが、今では、全国津々浦々にまで広がり、さまざまな取り組みがなされています。そのいくつかをご紹介します。

### （事例1）静岡県御殿場南小学校「南っ子を元気にする会」

静岡県御殿場南小学校に、「南っ子を元気にする会」があります。最近、研修会におじゃましました。研修が始まる前に学校の先生とお話すると、「学校としては、できるだけ地域と一緒にいろいろなことをしてみたいのですが、地域の方々にはまだそこまでの意欲が高まっていないのです」というお話でした。

全国を歩く中で、地域の方々は、学校のいろいろな活動に対して積極的に関わっていきこうという意欲があり、それを実現する力もすでに蓄えられていることを実感しています。おそらく御殿場でもそれは同じで、学校からお声がかかれば、「やりますよ」という方は、必ずたくさんおられると思いました。

地域の方と先生方と一緒に参加する2時間程の研修が始まりました。先生方に、「地域の方にこんなふう活躍してもらおうと、もっと楽しい授業ができると思うことがありますか」と質問したら、いろいろ出てきました。先生方にそれをボードに書いていただいて、「どうですか、地域の方。学校の先生方は、皆さんの力を授業の中に反映していきたいとおっしゃっていますが、おやりになる方はいませんか」と言うと、次々と手が挙がるのです。会場には100人くらいおられましたが、瞬く間に、「こうやりたい」という先生と、「一緒にやりますよ」という地域の方の組み合わせが、15組もできあがりしました。意思表示した全ての先生に2人か3人ずつの応援団ができたのです。

### （事例2）神奈川県厚木市

神奈川県厚木市でも研修会をしましたが、同じように20人くらいの組み合わせができました。

研修が始まる前、体育館に入ってこられた先生方の顔は「面倒だな」という感じでした。そこに明るさはありませんでした。2時間の研修が終わりました。体育館から出て行く先生方の顔は、晴れやかでした。先生方は職業としてやっているという部分があるので、なかなか地域の方に「手伝ってね」とは言いにくい環境なのですが、地域の方の応援を受けられるようになると「明日から学校に来るのが楽しいです」とおっしゃる先生も出てくるのです。地域の力を活かしていくというの

は、子どもたちだけによいではなくて、先生方にとっても大変よいことなのです。さらには、地域の方にとっても大変よいことなのだということを、これからお話ししたいと思っています。

### （事例3）栃木県鹿沼市立北小学校「北光クラブ」

鹿沼市での実践例になりますが、鹿沼市立北小学校に「北光クラブ」があります。

10年ほど前になりますが、当時の校長先生は、「開かれた学校をつくっていくためには地域の人が学校に来てくれることが一番いい」と言っていました。その校長先生の言葉に、地域は動きました。さっそく「校舎を使わせて欲しい」と学校に申し込んだのです。学校は、ミーティングルームや家庭科室が空いている時間に、それらを地域に貸し出しました。そのことがきっかけとなり、地域の方々のネットワークである「北光クラブ」が作られました。「はぐくみネット」の鹿沼版とイメージしていただくとよいと思います。

今、そこが、学校の授業の応援をしています。学校から「こういう講師はいませんか」と尋ねられると、「北光クラブ」は地域に向かってその情報を発信します。それを受けて、地域が「こういう人がいるよ」という情報を伝えてくると、紹介された人を訪ね、「学校と一緒にやってくれませんか」とお願いをします。その方が了解してくださると、学校に引き合わせます。北光クラブは、皆さんと同じように、コーディネーター役を担っているのです。

先生方は、北光クラブの活動に、とても感謝しています。北小学校に異動してきた音楽の先生が、最近、地域と協働した音楽の授業を行いました。その先生は授業後に「この学校に来て初めて自分が本当にやりたいと思った教育ができました」とおっしゃっていました。その授業を受けた小学校6年生は、「6年間で、初めて自分が楽しいと思える授業を受けました」と言っています。小学6年生の言葉にはユーモアが含まれていると思いますが、先生も本当にいい授業ができた、そして、子どもも本当に楽しいという、そういう授業が「北光クラブ」の力でできあがっています。

鹿沼の学校に、徐々に、「北光クラブ」のような組織づくりが広がってきています。市内に30校（21小学校と9中学校）ありますが、今では、5つの学校に、学校と地域をつなぐ役割を持つ組織ができあがっています。

### （事例4）栃木県鹿沼市立石川小学校

学社融合のスタートは、鹿沼市立石川小学校からでした。10年前の平成8年から取り組み始めましたが、石川小学校では、毎日のように、保護者や地域の方が入った授業が行われています。多いときには、一日に2時間も3時間も行われています。一番困ったことは何だと思えますか。石川小学校は正門からしか出入りできないのですが、地域の方が車で来られるので、門のところのコンクリートと土との境目のところが、どんどんへこんで、でこぼこになってしまうことです。それを6年生たちが朝のうちに、道具を持ってきて直すのです。「いつも地域の方たちが来てくれるのに、でこぼこでは申し訳ないから」と言って、自主的に直すのです。自然に、そういう子どもたちが育ってきています。

## 3. 学校と協働するために必要な学校理解

学校と地域がうまく結びつくことで、学校の授業が楽しくなって、子どもたちが学校を楽しんでいるようになるということは、皆さんも取り組みの中で、肌で感じてこられたのではないかと思います。

これからは、ますます学校と地域の協働が必要だと言われていますが、学校と協働するためには、学校のことをきちんと理解しておくことが必要であると言われてます。そこで、1つめのワークショップをやりたいと思います。

## ■ワークショップ1「学校が抱えている悩みを知ろう

ー今、学校はどんなことで大変なのでしょうか？ 皆さんで考えてみましょうー

今日は、地域の方（保護者を含めて地域の方と言っています。学校の関係者以外の方のすべてです）が多いということですが、地域の方は、今、自分が関係する学校が（あるいは、自分の情報として得ている一般的な学校でもいいです）、どんな課題を抱えていると思いますか。下のワークシートに、学校が抱えている課題を書いてください。地域からみた課題です。気楽に書いてください。最低、1つ書くことを目標にしましょう。

1	
2	
3	
4	
5	

いきなり難しい質問をしてしまいましたが、課題を書くことができましたか。最近の全国的な傾向で申しあげますと、1つは「少子化」です。子どもが少なくなって閉校になるかもしれないという心配があります。昨年度の「はぐくみネット」の発表を聞いていると、大阪市にも小規模の学校がありましたね。20年位前には予想もしていなかったことですが、都市の中心部でも、どんどん少子化がすすんでいますね。これには驚きました。2つ目は、「不登校」です。3つ目は、「学校の荒れ」です。これは、暴力的な問題から学級崩壊までさまざまあります。最近はあまり表立ってないのですが、お話を聞いていると出てくるのが、やっぱりこの課題です。それから、「心理的不安定」。子どもたちを取り巻く環境が変化し、心理的な課題を抱えた子どもが多くなり、不安や悩みをもつ子どもが増えてきているということも指摘されます。それ以外にもたくさんの課題があると思うのですが、皆さんが、自分たちの学校をどう認識しているのかということをお話していただくために、今、簡単なワークショップをやりました。

学校と協働するときには、まず、学校が抱える課題をつかんだ上でアクセスして欲しいのです。「先生、そんなこと言ったって、できるはずじゃないか。それだけの余裕があるはずじゃないか」と、議論をしたのでは話は前へすすみません。先生方のこと、学校のことを理解してアクセスすると、先生方も、皆さんが自分たちの立場に立って考えてくれていると感じ、心を開きます。門を開いているだけでは「開かれた学校」にはなりません。心の扉を開く必要があるのです。

今後の「はぐくみネット」の会議や研修では、ぜひとも、校長先生や学校の先生方のお話を聞く機会をつくり、学校が抱える課題を把握することにも努めていただければと思います。

## 4. こんな学校はどうしたら生まれてくるの？

（事例1）10年間、不登校の子どもがいません。不登校になりそうね、みんなで学校へ誘おうよ  
今、申しあげたいいくつかの課題について、学社融合の考え方や手立てを用いると、それらが解決できるということについて、お話ししましょう。

私には、全国に、およそ300人の仲間（「学校と地域の融合教育研究会(注)」で学びあいながら、

(注)「学校と地域の融合教育研究会」Webページアドレス <http://yu-go-ken.net/>

地域・保護者・教員・教育委員会などさまざまな立場で実践に取り組んでいる)がいます。その仲間たちから、取り組みをすすめていくと不登校の子どもがいなくなったという話を数多く耳にします。なぜそうなるのかと言われても私たちにも答えようがないのですが、不登校の子どもがいらないというのは、事実です。

平成8年に取り組んだ石川小学校にも、その当初は不登校の子どもがいました。でも、学社融合に取り組んでいく中で、不登校の子どもがいなくなりました。10年経った今も、ゼロです。しかし、ある時、再び不登校の状態になりそうな状況が生まれましたが、不登校を未然に防いだのは、驚くことに地域の方々だったのです。

11月ごろに新入児健診があります。この時にも地域の方が来て、受付をしてくださったり、子どもを並ばせてお医者さんのところへ連れて行ってくださったりと、いろいろな補助をしてくださいます。その支援の方が、Aちゃんという入学予定児が学校の中に入ろうとしないことに気づいたのです。お母さんが1時間も説得しても、校門に踏みとどまり、一步も入ろうとしないのです。その姿を見ていた支援の方が、学校の中でいろいろな学習支援活動をやっている方々に呼びかけ、「Aちゃんを救えプログラム」というものを作りました。そのプログラムは、まずは、お母さんに学校に馴染んでもらうというものでした。お母さんに趣旨を説明し、お母さんができる学習支援を選んでもらいました。「読み聞かせならできます」ということでしたので、お母さんに、教室で読み聞かせをしてもらいました。Aちゃんには、「お母さんの付き添いで一緒に学校に来てもいいよ。お家で待っていてもいいよ」という形で、呼びかけてもらいました。お母さんが学校に通いだして1ヵ月後くらいから、Aちゃんも学校に顔を見せるようになりました。地域の方とも顔なじみになりました。小学生とも顔なじみになりました。家の近くでは、地域の方と話したり、小学生に混じって遊んだりするようにもなりました。プログラムを実行して半年後の4月の入学式には、Aちゃんはちゃんと自分の席に座っていました。お母さんは、地域の方にとっても感謝しています。お母さんは、それ以来ずっと学校のことに熱心に関わり、今はもう4年生の親になっていますが、一生懸命、学校と協働の授業などをやってくださっています。

学社融合をすすめていくと、このように保護者同士のネットワークが作られ、課題に対処するという姿も出てくるのです。学校としては感謝しても仕切れないほどです。実は、学校は、今お預かりしている子どもだけでも手一杯なのです。新しく入ってくる子どもたちも、その時点で自分たちの子どもなのですが、そこまではとても手が回らないのが現状です。そういう学校にとっては、今お話したような地域の支援があることは、とても大きな支えとなります。

ただし、そんな学校の現状を反省させられることがありました。千葉県のある幼稚園では、半年前に入園予定が決まると、先生方は入園予定のご家庭にお手紙を出すそうです。そこには「お家では、お子さんのことを何と呼んでいますか。普段の呼び方を教えてください。また、申し訳ありませんが、最近撮ったお子さんの写真を1枚譲ってください」と書いてあります。そして迎えた4月の入園式、先生方は門で待っています。お母さんと手を繋いで門に入ってくるすべての子どもに、「〇〇ちゃん」と声をかけるのです。子どもは先生が自分の名前を知っていることに驚くと同時に、ホッとするみたいですね。

私は、小学校ももっと努力をしなくてはいけないのではないのかと考えさせられました。個人情報保護の観点から逆に難しくなっている面もありますが、半年前にお子さんを健診で預かるのですから、その子たち一人ひとりのことをもっと把握して、入学式のときに名簿や名札を見ながらでは

なくて、顔を見ただけで子どもの名前を呼べるような努力が必要なのではないかと反省させられました。いろいろな人と出会うと、自分もいろいろなことを考えさせられます。

## （事例2）県内でも深刻化した「荒れ」が、たちまち沈静化しました

次に、「学校の荒れ」の課題です。私も驚きましたが、学社融合という手法を使いますと、「学校の荒れ」が沈静化してしまうのです。

これは、岩手県のある中学校での出来事です。その中学校の「荒れ」はとても深刻な状態にありました。その状態に、地域が動き出しました。なんとかしたいと検討を重ね、学社融合の手法を取り入れて、地域と学校が一緒になって子どもと直接的に向き合える場をつくりました。そうしましたら、2年後、「荒れ」のない、校舎の中が壊されることのない学校に変わったのでした。

岩手県の学校教育関係者がどうして沈静化したのかを検証したところ、学社融合という手法を取り入れたからではないかということになりました。その手法は、地域の方が1年間に10日間学校に通うという簡単なものでした。もちろん、腕章をつけて学校の中を回ったわけではありません。そんなことをしたら、中学生たちは、自分たちを監視する存在としてしか大人を見なくなって、素直に大人を受け入れなくなります。そういうやり方ではありませんでした。皆さんの各小学校にある生涯学習ルーム事業と同じように、大人が学校に勉強しに行ったのです。ただ、皆さんのところと違うのは、大人と子どもが一緒に勉強する場を設けたのです。地域の講座を、学校を会場に開催し、中学生たちはそれを総合的な学習として学び、地域の方は生涯学習として受講したのでした。

講座が始まった頃、地域の方が教室に入っていくと、中学生は「なんで来たんだ」みたいな目で見るとすね。でも、そのうち慣れてきます。何回かたつうちに、その部屋でだけはしゃべるようになったそうです。それからまた、何回かたつと、今度は地域の方が学校に入っていくと、「こんにちは」とか「おばちゃん、また来たんだ」とかいう状態になったそうです。そうしたら、いくらか「荒れ」が治まってきたと言うのです。

2年目が始まりました。「今年もよろしくね」「おじさん、今年は何を教えてくれるの?」、そういう会話が学校の廊下でさりげなくかわされるようになっていきました。するとどうでしょう。「荒れ」が半分くらいに治まっていったそうです。そして、2年目の半ばを過ぎる頃には、子どもたちと地域の方がスーパーや道路などで立ち話をする姿が見られるようになってきました。そうしましたら、あれほど大変だと言われていた「荒れ」が消えたのです。凄いでしょ。腕章もつけなかったし、大人が叱ったわけでもない。ただ、一緒に勉強しただけなのです。でも、子どもたちは変わりました。

今申しあげたように、学社融合によっても、不登校の子どもがいなくなったり、荒れが解消されたりということもあるのです。「不登校」や「荒れ」の課題に対して、学校は、これまでにいろいろな取り組みを実践してこられました。それで治まる部分もたくさんありました。でも、学校の考えた手立てだけでは解決しないこともありました。地域の力を入れると必ず改善されるというわけではありませんが、問題解決の一つの方法として、学社融合に取り組んでみる価値は十分にあると思います。

## 5. こんな声はどうしたら生まれてくるの？

学社融合をすすめると、子どもたちが授業をととても楽しいものにとらえるようになるのです。学校に行くのが楽しい。そして、はりきって勉強できるよと言うのです。中にはとんでもない感想も

あります。「暇つぶしにちょうどよいです」と言った子がいます。皆さんのところでも20分間の休み時間に、読み聞かせをしているサークルがあるようですが、鹿沼での実践に、休み時間に月1回のミニコンサートを開く実践があります。地域の方が演奏家を連れてきて、音楽室で演奏会を開いてくれるのです。その生演奏を小学校1年生から6年間聴き続けてきた子が、雑誌社のインタビューに対し、「暇つぶしにちょうどいいです」と答えたのです。地域の方が一生懸命考えてやってくれているのに、とんでもないですね。でも、この子は、自分たちにとっては当たり前だよと言っているのだと思います。生演奏を聞くことが、日常化しているのです。特別なことではないのです。それほど、子どもの中に定着していると、私は解釈します。

子どもだけではなく、教員や地域の方々も、学社融合の成果を数多く述べています。

#### ○子どもたちからの声

- ・「おじちゃんやおばちゃんたちはいろいろなことを知っていてすごいなあ」  
(総合的な学習で地域の方の授業を受けた小学3年生)
- ・「こんな楽しい授業をはじめて受けました」(地域の指導による琴の授業を受けた小学6年生)
- ・「暇つぶしにちょうどよいです」  
(休み時間に学校内で開かれるミニコンサートに参加した小学6年生)
- ・「僕の責任で先生を説得し絵手紙の授業をやってもらいます」(絵手紙展を訪れた中学2年生)

#### ○教員たちの声

- ・「地域の方々の参画で、自分の理想の授業ができました」(小学校音楽担当の教員)
- ・「私たちには悩みを相談する仲間がいます」(小学校の国際理解教育担当教員)
- ・「新刊図書を5月には貸し出せるようになりました」  
(図書館ボランティアと協働する小学校教員)
- ・「地域の方との協働で、職場体験学習が単なる体験で終わることがなくなりました」  
(中学校の職場体験学習担当の教員)
- ・「5分の1の労力で実施できました」  
(総合的な学習の時間を学社融合ですすめた中学2年担当学年主任)

#### ○保護者・PTA・地域住民の声

- ・「学校へいくことが楽しくて仕方ありません」(小学2年生保護者)
- ・「必要なときにはいつでも声をかけてください」(小学4年生保護者)
- ・「子どもたちの笑顔が、私の元気の源です」(小学5年生保護者)
- ・「職員室にmy湯呑があるの」(コーディネーター)
- ・「平日昼間に学校が利用できるから、短い時間でもいろいろ勉強できます」  
(学校施設を利用するサークルのメンバー)
- ・「中国へ旅立つ勇気は中学生からいただきました」(聴覚障害者絵手紙サークルメンバー)
- ・「今回のイベントには今までの何倍もの参加者を得ることができました」  
(国際理解教育支援を行っている国際交流グループのメンバー)

## ■ワークショップ2「学社融合の実践事例を聞いて」

これまでに学社融合がもたらした成果について、実践事例を踏まえながら述べてきましたが、それをお聞きになって、どう思われましたか。

ここでワークショップ2に取り組んでみましょう。次の質問にイエスカノーかで答えてください。

① 実践事例に感動しましたか？

YES

NO

② 自分たちの学校や地域でも実践したいと思いますか？

YES

NO

③ 自分たちの学校や地域で実践することは可能ですか？

YES

NO

①は、「すごいなあと思った」という方になりますが・・・9割が感動したとおっしゃっていますね。

②はどうですか。・・・同じく9割の方が実践してみたいとおっしゃっていますね。

じゃあ③。③の質問は、「地域と学校が一緒になって、子どもたちのために、よりよい学校教育活動を作っていくという学社融合を、今、自分たちの地域、学校でできるか。今の状態で実践が可能だろうか」と尋ねているわけです。・・・これは、イエス5割、ノーが5割ですね。まだ、ちょっと難しいと考えておられる方が、半分いるということですね。ありがとうございました。

でも、嬉しいですね、半分为イエスですよ。大阪市の皆さん、すなわち「はぐくみネット」の皆さんは、やはり凄い。他の地域に行っても同じことを聞くのですが、②の「やりたい」は、どこでもそれほど変わりありません。100%近くのところもありました。でも、そういうところでも、③の「実行できるか」は、2割や3割に下がってしまうのです。ですから、5割も確保できているというのは、凄いことなのです。私の研修歴の中では、全国で2番目に高い数字です。

### ■ワークショップ3「自分たちの小学校区における学校と保護者・地域住民の関係を考えてみよう」

それでは、ワークショップ3です。ここで、皆さんの小学区における、学校と地域の関係を明らかにしてみましょう。10問用意しました。学校の先生方もお答えください。

①学校の情報を伝える手段がいろいろと講じられている

YES

NO

②学校便りが月1回程度は学区の全戸に配られている

YES

NO

③電話に出た教職員が、自分の名前を名のっている

YES

NO

④学校の活動の公開日などが年数回設定されている

YES

NO

⑤先生方が「ありがとうございます」ということが多い

YES

NO

⑥保護者や地域住民に学校でボランティア活動する意欲はある

YES

NO

⑦保護者や地域住民が学校でボランティア活動している

YES

NO

⑧学校が重点的に取り組んでいることが言える

YES

NO

⑨校長先生の名前（フルネーム）が言える

YES

NO

⑩立ち話できる教職員がいる

YES

NO

< “YES” はいくつありましたか？ >

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

改善が必要である

良好な関係にある



①には、皆さんの「はぐくみネット」の情報誌も加えてください。②には、校長室便りとか、学級通信とかもあると思いますが、学校の活動を知らせるものが、月1回程度は学区の全住民に配布されているかということです。保護者だけへの配布はだめです。③は、「〇〇小学校の〇〇です」と名のりということです。今、民間企業では、電話を受けた者が企業名に続けて自分の名前も名乗ることが常識化しています。説明責任の一環ですね。さあ、皆さんの学校ではどうでしょうか。④ですが、公開日を1回だけとしなかったところが凄いでしょ、年数回です。⑤です。地域の皆さんが学校に出入りしたとき、あるいは、学校の外で地域の人に会ったときに、学校の先生から「ありがとうございます」という言葉を聞く度合いはどの程度ですか。「こんにちは」とか「おはようございます」というあいさつだけではないですよ。その後、「この前は、〇〇でお世話になりました。ありがとうございました」という言葉が続きますかということです。

⑥からは、質問の対象が変わっていますね。①から⑤は学校のことです。⑥から⑩は地域のことです。

では⑥です。うちの校区には学校でボランティア活動する意欲を持つ人が多くいると思う方は、イエスです。⑦は実際に活動している人がいますかということです。⑧はどうですか。学校がこういう取り組みをしたがっているということがわかっているときは、イエスにしてください。それから⑨、これはおもしろいでしょ。私は教員の経験があるから「先生」って呼ばれていました。「先生」って呼ぶのは便利なのですよ。名前がわからなくても「先生」って言っておけばいいんですから。私は行政職から学校へ戻ったときに、3年生の理科を受け持ちました。そうすると子どもたちが「教頭先生」って、私を呼ぶんです。今まで個人名で呼ばれてきましたから、「教頭先生」と呼ばれると、なぜか心が落ち着きませんでした。そこで、「君たちさ、教頭先生の名前言える？」と聞いたら、言えた子は30人中わずか数人しかいませんでした。学校の世界は「先生」と呼べば、それで済んでしまいます。その人間を知っているか、知らないかには関係ないのです。ですから、今日、来ておられる先生方も、保護者の方が自分のことを「先生」と呼んでくれているから、自分のことを知ってくれていると思っていると、大間違いですよ。実際には、「あの先生の名前は何かだった？」ということも多々あるのです。そして誰も名前を知らなかったなんてことも、たまにはあるのです。⑩です。ご自分の身の回りには、「あのさあ」と立ち話ができる先生が何人いるでしょうか。学校と地域のコミュニケーションの度合いを問う問題です。

それでは、イエスの数を数えて、1から10までの該当する数字に○をつけてください。くだらない質問だと思う方もおられると思いますが、意外と核心をついているのですよ。結果は、いかがですか。…イエスが1から5までの方と、6から10までの方は、ほぼ5対5ですね。5割は良い関係にありますが、5割は改善が必要だということです。

## 6. 学校と地域の新たな関係を考えよう

それでは、ここで、ビデオをご覧くださいませ。一本目は、私が取り組んでいる板荷(いたが)ふるさとオペレッタ(注)の実践です。5年前の作品(3作目)の制作過程を説明したビデオです。二本目は、鹿沼市立北中学校における「総合的な学習の時間」の実践です。二つのビデオは質的には違うものです。どこが違うのかを考えながら見ていただきたいと思います。

---

(注)「板荷ふるさとオペレッタ教室」：鹿沼市立板荷中学校の開放施設の積極的活用をめざして、板荷地区コミュニティ推進協議会が設置した住民大学の中の教室。平成10年より実施。毎年、週1回30回程度の練習を行い、オリジナルの作品を創って8月末に公演。

## VTR1「板荷ふるさとオペレッタ 2000 は、こうしてつくられた」30分

【1】「板荷ふるさとオペレッタ 2000『忘れ得ぬ日々忘れてはならぬ日々～子どもたちの太平洋戦争』公演の抜粋。冒頭あいさつで中学生の教室代表が「オペレッタは私たちの手作り」と述べ、その後「第1幕 戦争前」から始まり、「召集令状が来た」「校庭が芋畑に」などの場面が続き、太平洋戦争時代の板荷の変遷を表現している。そして最後に「第9幕 終戦」の場面があり、子どもたちが元気に未来に向かって歩き出す姿が演じられている。それぞれの場面が、台詞と歌で演じられている。

【2】台本づくりの様子が紹介されている。最初の映像は、教室の子どもたちが農家の縁側で高齢者から戦争当時の話を聞いているもの。次は、板荷中学校の体育館。日曜日の夜。床に円座になった子どもたちが、話し合っている。変わって舞台の上で、自分たちが作った台本の劇を披露している姿。その映像に本番の映像が挿入される。全く同じ動作である。オペレッタの劇は、子どもたちが手作りしていることがわかる。

【3】歌づくりの様子が紹介されている。メンバーの子の家。二人の中学1年生がパソコンで歌を作曲している。歌詞を作り、そこに曲をつける。これもすべて子どもたちの手で行われている。

オペレッタというのはセリフと歌ですすめる劇です。オペラのミニチュア版みたいな感じですね。板荷オペレッタでは、セリフや劇の動きそのものを子どもたちが作っていきます。最初、子どもたちは地域に行って、戦争体験を聞き取りました。しかし、勤労奉仕などの言葉だけを集めても、そこに思いがなければ劇はつくれません。もう一度、当時子どもだったおじいちゃん、おばあちゃんが、その言葉を聞いたときにどういう思いを持ったのかということ聞き取りに行かせます。そうすると劇が作り始められます。この時は4つのグループに分かれて台本作りをしました。そして、台本ができあがると、グループごとに舞台にあがって、動きをつけて私に見せてくれます。そして、最もよかった1つのグループの台本が採用されます。歌も子どもたちの手作りです。

【4】大道具、小道具づくりなどのスタッフの活動が紹介されている。スタッフは、保護者であったり、地域住民であったりする。照明を担当する母親。演技を指導する高齢者。軍服のゲートルの巻き方を教える高齢者。背景画を描く地元の人。セットをつくる父親。衣装を縫う母親。当日の黒子としての活躍。

教室の主催者は、音楽担当の福田玲子さんと私の2人しかいません。500人もの人を集めた発表会を、毎年、2人でやってきました。

実は、子どもに演技指導をしてくれるおばちゃんや、戦争の服装を持ってきてくれるおじいちゃん、背景にあった小学校の絵を描いてくれる絵描きさんなどが、頼みもしないのに来てくれるからできているのです。子どもたちは、舞台の練習で精一杯です。照明さんも、大道具さんも、小道具さんも、保護者の方々が担当してくれます。これ以外にメイクさんもいるんですよ。

中学3年生は「受験があるから来ない」と言っていたのですが、3日前に「どうしても出してほしい」とやってきました。この子たちの場면을急遽作って、差し込みました。3日前に来て、出演できるのが板荷オペレッタのよいところです。

【5】演技後に会場を埋めた500人の人々と交流する出演者たち。「こんなにたくさんの方が見に来てくださってありがとうございます。地域の方々と交流できたことが何よりも嬉しい」と中学生の出演者が涙を流しながら語っている。

ここは山の中にある中学校です。お隣に小学校があります。1小学校1中学校の地域で、小学校が140人くらい、中学校が100人くらいです。お客さんは、大体毎年400人から500人入ります。子どもたちの感動は、満足した演技ができたことだけにあるのではなく、これがきっかけとなって、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人の交流がおきたことにあるということです。板荷ふるさ

とオペレッタの意味や意義を、子ども自身が自覚して取り組んでいるということなのだと思います。もう一つのビデオを見ていただきます。

## VTR 2 「生涯学習って何だろう～鹿沼市立北中学校の総合的な学習の時間」 30分

【1】200名の中学2年生たちが、6日間にわたって、15のコースに分かれ、地域の方々と一緒に学んだ概要が収められている。映し出された活動内容は、「リサイクル活動に取り組む市民サークルと行った牛乳パックをリサイクルした葉書づくり」「地域の消費者団体と行った中学生の食生活実態調査」「民間茶道教室の先生やお弟子さんと取り組んだ茶道の学習」「手話通訳者たちと取り組んだ楽器を持たないオーケストラ活動」「図書館ボランティアと取り組んだお話会活動」「視聴覚ライブラリー職員と取り組んだ映画会」「市民サークルと取り組んだコーラス活動」など。これらの映像は、中学生自身が撮影したもの。

### \*ビデオの解説（一部紹介）

- ・ 「手話通訳者たちと取り組んだ楽器を持たないオーケストラ活動」：聴覚障害者の支援を考えるコースで、この手法は今回の中学生の学習のために開発したもの。耳が聞こえない、音が聞こえないとはどういうことだろうということ体を理解してもらうためのワークショップ。
- ・ 「市民サークルと取り組んだコーラス活動」：女性の市民コーラス「グミの集い」に中学生が参加。
- ・ 「体験ドキュメントを作ろう」：このビデオの映像は全て中学生が撮影し編集したもの。

【2】鹿沼市消費者まつりの様子。たくさんの方々と中学生が集まった開会式。着物を身に着けた茶道コースの中学生の姿も見られる。主催者挨拶する中学2年生。今回の消費者まつりは、鹿沼市と北中学校が共催する形となっている。場面は変わって、市民情報センターの和室。お話ボランティアコースの中学生がお話会を主催し、紙芝居やエプロンシアターをしている。以下、映像には、過去6日間で学んだ成果を活かして、映画会やジョイントコンサート、消費生活寸劇、音のない音楽会などのイベントを主催する中学生の様子が描かれている。

前半で見ていただいた映像は、初日か、2日目の映像です。そして、後半で見ていただいたのが7日目の映像です。中学生たちは7日間にわたってこの実践に取り組んできて、7日目、鹿沼市民情報センターで消費者まつりをやっています。この消費者まつりは鹿沼市と北中学校が合同で開催していますから、市長のあいさつの次には、中学生が主催者あいさつをしています。

それぞれのコースについて、発表がこの日に行われました。お話ボランティアを体験してきた子たちは、乳幼児を前にしてお話ボランティアをしています。この子たちは地域活動を体験したのではなくて、地域活動を実践するための学習をしたのです。

### ■ ワークショップ4 「二つのVTRを見た感想を書こう」

いかがだったでしょうか。感想を聞いてみたいと思います。

○板荷のオペレッタを見てどうでしたか。

（会場から）「すばらしかったと思います」「皆さん、短期間ですごく上達されたんだと思いました」

○後半の「総合的な学習の時間」はどうでしたか。

（会場から）「あれだけの時間をかけて取り組めるというのはすごいなと思いました」

ありがとうございました。「総合的な学習の時間」には、15の市民グループが関わっていました。実践後に反省会がありました。関わった地域のたちは、皆、口を揃えたかのように、「自分たちのところに来た中学生はみんな素晴らしい子だ」と言うのです。実践が始まる前に、学校は「いろいろな子がいます。皆さんに迷惑をかけるかもしれません」と言っていました。地域の方は言いま

した。「そういう子も、私たちの地域の子ですから」と。このような地域の思いの中で学んだ子どもたちは、先生方からは、「普段と全く違った子」に見えたそうです。

## ■ワークショップ5「二つの実践を比較してみよう」

次の表を見てください。皆さんにお尋ねします。板荷のオペレッタのビデオはどうですか。いい

	オペレッタ	「総合的な学習の時間」
活動への感動	○	○
子どもの成長	○	○
教育の分野	社会教育	学校教育
実施時間帯	夜7時から	平日の昼
場所	学校	学校、地域の施設
参加者	任意参加	全員
コミュニティ意識づくり	○	○

なあとおっしゃいましたか。「総合的な学習の時間」のビデオはどうでしたか。…どちらも良かったということですね。両方に○を記入しますね。うれしいです。ありがとうございます。子どもの成長

についてはどうですか。…両方とも子どもたちがすごく成長しているんじゃないかと、あるいは感動があるなあとおっしゃっている方が多いですね。両方に○ですね。教育の分野ですが、オペレッタは、社会教育の分野です。学校の開放施設である体育館を使っていますが、地域がやっている活動です。学校は一切関与していません。余談になりますが、オペレッタの映像を学校の先生方に何も説明しないでお見せすると、「えっ、縦割活動の『総合的な学習の時間』じゃないの?」という方が多いんです。確かに「総合的な学習の時間」に似ていますが、全くの地域活動です。後半のビデオは完全に学校教育です。中学2年生の「総合的な学習の時間」で実施した学習です。でも、説明しないと、日曜日に地域で行った活動のようにも見えるでしょ。実施時間帯については、オペレッタは、曜日は年によって変わりますが、夜の7時からやります。「総合的な学習の時間」はもちろん平日の昼間です。場所はどちらも学校です。「総合的な学習の時間」は地域の施設も使いました。参加者については、オペレッタは任意参加です。参加したい子が来ています。オーディションなどはしていません。「総合的な学習の時間」は学校の授業ですから当然、学年全員です。

こうして見ていくと、平日の昼間なのか夜なのかということと、地域がやっているのか学校がやっているのかといったこと以外は、とても似通っていると思いませんか。どちらも、子ども自身が感動する取り組みになっていますし、子どもが育つ活動になっていると思いますよね。

では、コミュニティ意識づくりはどうですか。コミュニティ意識とは、子どもたち自身が地域の一員であると自覚することや、ふるさと意識とか、それから、地域の大人に対する感謝や、尊敬の気持ちとか、交流ができていたりとか、そういう意味を含めて言っています。そういうものがオペレッタで養われていると思われる方は、どの程度いらっしゃるでしょうか。では、「総合的な学習の時間」についてはどうですか。…どちらもイエスですね。そうしますと、必ずしも地域の活動だけでコミュニティ意識が育つというわけではないということがわかります。学校の授業を通して、コミュニティ意識が作られていくのですね。

## 5. 学社融合ってなあに?

### (1) 学社融合の考え方～学校教育と地域活動を重ね合わせる

板荷の子どもたちは小・中・高校生合わせて、たぶん300人くらいいると思いますが、私がオ

ペレットタで関わっているのは20人から30人です。つまり、10%くらいの子どもにしか影響を与えられないのです。それでも任意活動ですから仕方ないのです。皆さんのところはどうですか。いろいろなイベントをおやりになったときに、小学校区の対象者が全員来ていますか。皆さんの頭の中に、もっとたくさんの子どもにこれを体験させたいという思いはないですか。地域活動にとっては、任意であることははずせないのですが、すばらしい活動になればなるほど、より多くの子どもに、できたら全員に体験させて、みんなが同じ気持ちでこのコミュニティを作っていきたいと望むのではないのでしょうか。今日の研修会で皆さんに考えていただきたいのは、そういう思いを、学校教育を通じて実現しようということなのです。

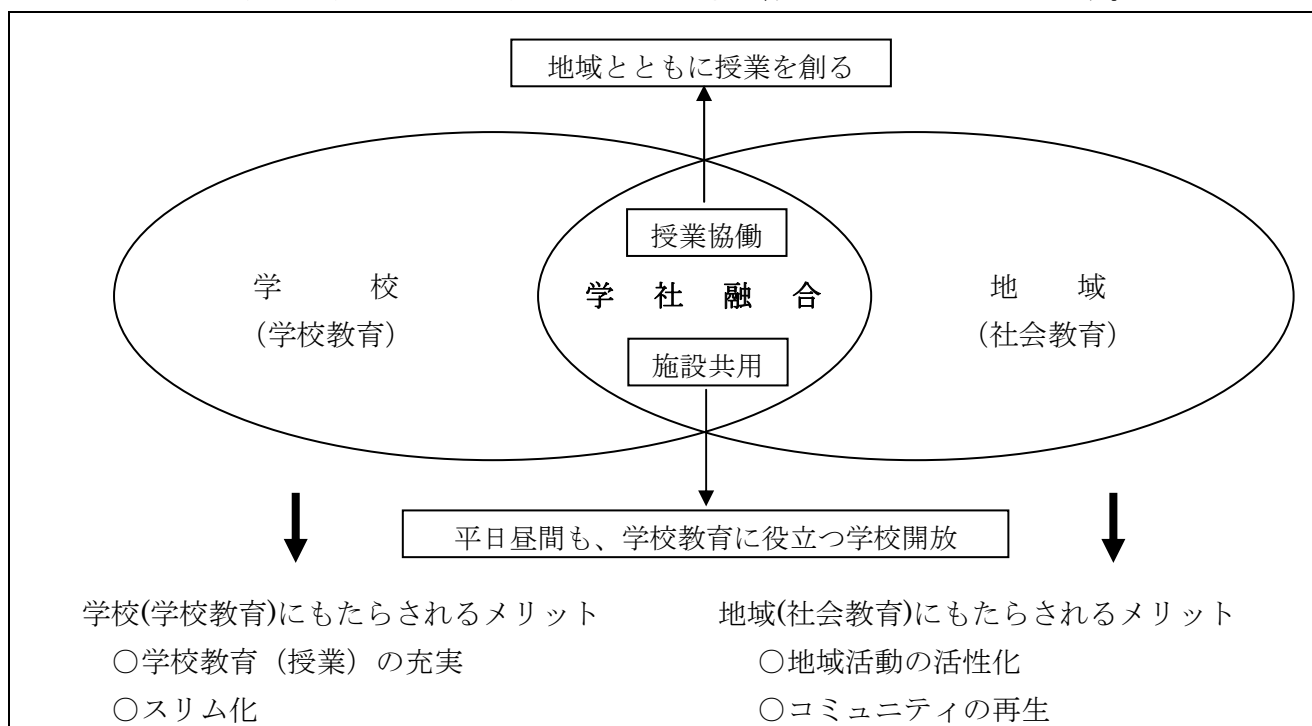
表をもう一度見直してください。地域と学校で大きな違いがあります。参加者です。地域の活動は「任意参加」です。学校は「全員参加」です。学校教育を通じた方が、全員に成果を定着できるということです。

私たちは、地域で感動ある活動を行っています。そこで得られる感動を、できれば地域の子どもたち全員に共有してほしいと思っています。意識の共有は、コミュニティ形成の基盤です。だから、地域の活動と学校の授業を融合させたいと考えているわけです。

次の図を見てください。「学社融合」とは、学校の活動と地域の活動に重なり合いを作っていくことです。重なった部分が、「学社融合の活動」です。

重なった部分を見てください。そこは、学校教育でもあり、社会教育・地域の活動でもあるわけです。今までは別のものと考えられていた教育が、こうすると同時に成り立つのです。私たちが地域の活動として子どもに提供するものが、学校にとっては授業となるのです。また、逆も言えます。学校が授業として提供するものが、地域の活動ともなるのです。

われわれは、地域の思いと学校の思い、そして地域の育て方と学校の教育を重ね合わせることで、より心豊かでたくましく生きる力を身につけた子どもを育てることができるのです。



学社融合を意図して活動する地域の方々と、いわゆる「学校支援ボランティア」との違いは何かというと、学社融合を意図する方々は、自分たちの活動を、学校を支援するためのボランティア活動ととらえていないということです。自分たちの地域の活動、自分が好きでやっている活動の一部

分が学校の活動と重なっただけにとらえているのです。学校へのお手伝いとか、学校への協力意識ではなくて、基本的には、学校教育の場を活用して、自分たちの考えを子どもたちに伝えたり、社会的に実現したりしていくという考えなのです。自分たちの活動ですから、相手に謝礼を求める気持ちなど、一切ありません。むしろ、自分たちの活動を取り入れてもらって、そして、自分たちの考えを実現できるということで、学校に感謝しています。普通は、利用されるとあまりいい気持ちはしないのですが、この学社融合に関しては、学校から利用してもらおうと嬉しいのです。なぜなら、自分たちがやりたくても自分たちの力だけではできなかったことが、学校がかかわってくれることで実現できるからです。

先ほどのビデオの中に出てきた15のサークルは、なぜ学校に関わったと思いますか。中学生と一緒に食生活の実態調査をした事例からは、学社融合の仕組みのよさがはっきりと読み取れます。中学生が行った食生活調査は、実は、団体がその年の重要課題に掲げたことだったのです。全部の中学生にアンケート調査をしたかったのですが、1民間団体ですから、なかなか協力が得られなかったのです。ところが、北中学校の中学生が「総合的な学習の時間」として、中学生の食生活の実態把握を課題にとってくれたのです。喜んでいましたよ。中学校がのってくれたおかげで、2,000人のアンケートがとれたのです。これはもう団体にとって最高でしょ。学社融合とはそういうことなのです。だから、この団体は決して学校に対してやってあげたという意識はないのです。むしろ、「自分たちができなかったことを、学校が関わってくださったことでできるようになりました。ありがとうございました」と言っています。

このことが、実は、学校の負担を減らすことにも繋がっているのです。「総合的な学習の時間」の実践のときに、2年生の学年主任が、「自分たちの学年で7～8人の先生が集まって、『総合的な学習の時間』についていろいろ研究し協議したプランがあったのですが、そのプランを超えるような実践ができた」とおっしゃっています。しかも、「自分たちが想定した以上の成果をあげることができた」といっていますが、話したいことはここからです。学年主任の先生は、「自分たちだけでやったときと比べたら、1/5の労力で、そういう成果をあげることができた」とおっしゃったのです。つまり、「学社融合による実践は、成果は大きく、負担は少ない」とおっしゃっているのです。学社融合によるスリム化は、学校にとって大きな魅力です。では、先生方は残った4/5の力をどこへ持っていったのでしょうか。新しく「総合的な学習の時間」が始まったために、その研究や実践に力を入れるため、他の分野の力を抜かざるを得ませんでした。限られた力ですから、それは、当然のことですね。でも、学社融合で「総合的な学習の時間」に入れる力はスリム化したから、再び他の分野の充実にも力を注ぐことができるようになったのです。

冒頭で、板荷中学校の選択家庭科の話をしました。赤ちゃんを抱いた中学3年生の話をしました。その時の担当の先生もこうおっしゃっています。「家庭科は自分の専門外です。自分ひとりでやっているときは、とても大変でした。正直つらくて仕方がなかったです。でも、地域の方々が一緒にやってくれるようになり、おかげさまで、私は自分の専門である英語の授業に専念できます」と。選択家庭科の授業も充実し、英語の授業も良くなったわけです。校長先生は実践を見て、「一石二鳥だね」って手をたたいて喜んでおられました。実は、学校は、この実践によって、「一石二鳥」どころではなく、「一石三鳥」、「一石四鳥」の成果を手にしたのでした。

## (2) 学校施設を使う地域の方と授業で協働しよう

大阪市の場合には、小学校の施設を開放して、地域住民の方々の生涯学習・スポーツを積極的に

支援していますね。ですから、大阪市では、今日お話ししてきた学社融合による授業の協働は、いますぐにでも始められるのです。学社融合による授業の協働を始める条件としては、

- ①学校に、地域と協働して充実した授業を行おうという意思がある。
- ②地域に、学校の授業を活用して、地域の思いを子どもに伝えたり、地域の活動を活性化したりしたいという思いがある。
- ③学校と協働できる人材が、学校の目に触れる身近な場所にいる。
- ④学校と地域をつなぐコーディネーターがいる。

といったことがあります。全国どこでも①や②の意識はかなり高まってきています。大阪市でも同じだと思います。全国で問題になっているのは、③と④なのです。学校が地域と協働したいと思っても、学校の目に触れる身近なところに人材がない、学校と地域をつなぐコーディネーターがないというのが現状なのです。しかし、大阪市は、違いますね。「はぐくみネット」がありますね。コーディネーターがいますね。生涯学習ルーム事業や学校体育施設開放事業として学校に通っている方がたくさんおられますね。すべて揃っているのです。あとは、学校が、その方々に声をかければ、今日お話ししたような学社融合の活動が始められるのです。日頃から学校に通っている方々は、学校から声をかけられたら、間違いなく大喜びします。そうですね、皆さん。「はぐくみネット」のコーディネーターさんも、学校からお声がかかれば、一生懸命、学校と地域をつないでくれますよね。

施設開放から授業協働へと発展させた事例を一つお話ししましょう。鹿沼市立石川小学校には、余裕教室はありませんでした。でも、学社融合をすすめるために、子どもたちが使っていないときに限って、家庭科室や図工室を開放することにしたのです。地域の方が4つのサークルをつくって、定期的に利用するようになりました。すると、教員は、休み時間などにそこを尋ね、雑談を交わすようになりました。面識が深くなった頃、教員は、料理サークルを訪れ、「どうでしょうか、ぜひ、家庭科の調理のお手伝いをしてもらえませんか」と声をかけたのです。料理サークルの方々は、「喜んで協力します。私たちに出来ることは何でもしますから、遠慮なくおっしゃってください」と答えたのです。それがきっかけとなり、料理サークルの方々は、調理クラブの指導にも携わるようになりました。レシピも作ってくださって、材料も前の日に買ってきてくださるといった具合に、活動は発展していきました。そのたびごとに、料理サークルに声をかけた教員は、他の教員から羨ましがられたということです。

学校の施設を開けば、人材が自然に集まってきます。その人材を活用すれば、授業を充実できます。大阪市には、生涯学習ルーム事業がありますね。講演の前に、大阪市の生涯学習ルーム事業の一覧表を見せていただきましたが、目に飛び込んでくる活動は、これも授業に活かしたい、この力も授業に反映したいというものばかりで、そういう環境を備え持った学校が、とても羨ましく思えました。

学校が行う地域の人材活用について、一つだけお願いをしておきたいと思います。地域の人材を指導者としてだけみないでほしいのです。つまり、「教える」ことだけを地域の人に求めないでほしいのです。学社融合の取り組みにも失敗談がたくさんあります。その原因の多くは、教える人を求めたことにあります。教えてくれて言われたら、ほとんどの人は後ずさりしちゃいますよね。教えることがそんな簡単なことではないことを知っていますものね。でも、「子どもたちと一緒にやってみませんか」とか、「一緒に過ごしてみませんか」と呼びかけられたら、違いますよね。「お料理一緒に作るんだったらやるよ」とか、「一緒にものづくりするんならいいよ」となりますよね。

この呼びかけは指導者としての参加を求めたものではありませんが、そこは大人です。教える意識がなくても、「〇〇ちゃん、包丁の使い方が危ないよ」とか、「私もそれでけがしたことあるよ」とか、そういう会話が自然に出てくるものなのです。そこが大切なのです。誤りも迷いもしないモデルではなく、試行錯誤するモデルが、子どもたちに見えるのです。

教える人を求めないで、子どもたちと一緒に活動してくれる人を求めていくということを基本にすると、学校も、PTAや、生涯学習ルーム事業・学校体育施設開放事業関係者に声をかけやすくなります。「皆さん、そういうことやってらっしゃるなら、この次のサークル活動のときに、うちの〇年生と一緒にやってくれませんか」と、言いやすいじゃないですか。教員から内容をきちんと伝えておけば、相手は子どもに必要なレベルでやってくれます。それだけで、子どもと大人が一緒に勉強するという、楽しいことができるじゃないですか。

生涯学習ルーム事業やPTA活動の中には、皆さんが計画を立てられる主催講座やイベントがありますよね。その講座やイベントを学校の授業として利用するという方法もあります。子どもたちがその講座を受けることが授業になるのです。ただし、その講座を計画する段階で、それを学校の授業として活用したいと考えている教員と、十分に話し合う必要があります。学校には教育課程という指導計画がありますから、皆さんがやっているものをいきなり学校の授業にそのまま反映することができにくいのです。指導計画にあわせていただいて、納得がいったら実施になります。でも、間違いなく、学校の授業として活用できる講座やイベントが、皆さんの活動の中にはたくさんあります。それらを学校にうまく利用してもらおうと、皆さんの活動も普及し、活発化すると思います。

#### ■ ワークショップ5 『はぐくみネット』でも授業での協働を实践しよう」

皆さんの頭の中には、もうすでに、あの地域の活動と、あの学校の活動を重ね合わせたら面白いなという考えが浮かんできているのではないのでしょうか。

皆さんが、今、頭の中に描いた活動を、下にメモしておきましょう。


いくつぐらい、メモできましたか。3つ考えついでいただけたなら、今日の研修は大成功だったと言えるのですが、いかがでしょうか。

さて、頭に描いた活動を実現しようとする、いろいろな課題も思い浮かぶと思います。例えば、「学校にどのように話すのか」、「学校のどの施設を借りられるのか」、「先生との話し合いの時間は何時にしたらいいのか」など、いろいろな課題を思いつくと思います。それらについてもメモしておきましょう。それらが、仲間や学校の先生と話し合うときの課題になります。




これで、学社融合の活動、特に授業協働型の学社融合を実践できる状態が整いました。学校の先生方と話し合い、今日考えた授業での融合活動をぜひとも実践してください。

## 6. まとめ

### (1) 子どもは感動で育つ

オペレッタやさまざまな学社融合活動に取り組んでいて思うことですが、子ども自身が感動したときに、子どもはすごく成長するのです。ですから、大人の役割は、子どもの感動を生み出せるような演出をしたり、コーディネートしたりすることだと思っています。そういう演出やコーディネートが出来たときには、子どもは自分の力で自分を高めていきます。指導することばかりでなく、演出やコーディネート、つまり学習環境を整えることも、「生きる力」を育てる重要な要素なのだと思います。

### (2) 子どもの感動は大人を動かす

子どもだけではなく、実は、大人も感動で動きます。大人を動かす一番よい方法は、子どもが感動する姿に感動させることです。「子どもがこんなに喜んでいよ」とか、「こんなに子どもが楽しんでいるよ」とか、子どものそういう姿を見て大人は感動します。そうすると、「子どものために1日くらい仕事を休んでやるか」といった気持ちにまでなるのです。

大人がなかなか動かない、集まってこないという小学校区があるかもしれませんね。それは、まずは、大人を動かそうとしないで、子どもを動かそうとしたらよいと思います。子どもが「楽しいよ、行こうよ」と家族を誘うようなものを作っていかれると、大人が動き出すと思うのです。

オペレッタも最初はそうでした。数名の保護者しか関わっていませんでした。そこで、私は新しい保護者の方が体育館の入り口に来たときには必ず傍に行き、「惜しかったね、5分前に来れば、お宅の子どもさんのこういうすばらしいところが見られたのに」と話すことにしました。そう言われた親は、次回からは、始めから終わりまでずっと体育館に居続けました。

私の持論なので当てはまるかどうかわかりませんが、コーディネーターにふさわしい人は、4つの特徴を持っています。1つは、とにかく「人が好きな人」。2つ目、「おしゃべりが好きな人」。3つ目、「話を聞くのが上手な人」、4つ目、「自分では何もできない人」。「えっ」と思われる方がたくさんいるかもしれませんが、4つ目は、特に重要なコーディネーターの要素だと思っています。なぜだかわかりますか？ 自分ができないと、相手がやった些細なことにも「すごいわね」って感動できますよね。感動された相手は、感動されたことに感動します。感動すれば、自分からもっと動きます。コーディネーターは、本当は自分でできても、できないふりをするのも大切なのかもしれません。とにかく、褒め続けるのがコーディネーターの第一の務めです。

### (3) 感動は、楽しさから生まれる

ぜひ、感動を生み出すような実践をやっていただきたいと思うのですが、その感動は楽しさからしか生まれてこないのです。話し合ったときに問題点ばかりを指摘されていると、話し合いがいやになってしまいますね。だから、基本的には話し合いは成果を認め合う方がいいです。課題を出す話し合いは、ごく一部の役員だけでした方がいいですね。困難を克服した楽しさもあるじゃないかという人もいますかと思いますが、楽しさが見えているから困難を克服しようとするのです。困難ばかりが見えては、克服する力は湧いてきません。

楽しさこそが、感動を生む原動力です。今日は、学社融合で子どもの力を伸ばすことを話してきましたが、学社融合の担い手は大人です。ですから、大人自身が、学社融合の活動に楽しさを感じられなければ、継続も発展もありません。学社融合の活動を具体化するときには、子どもの楽しさばかりでなく、かかわる大人の楽しさも意識して組み立てていくことが大切です。子どもも楽しめて、大人も楽しめる、そんな活動が、本当の学社融合の活動なのです。

#### ■ ワークショップ6「今日の研修をふりかえってみよう」

最後になりました。今日の研修結果を、参加者の皆さんに評価していただきたいと思います。質問は、3つです。ちょっとどきどきしていますが、それでは始めましょう。

① 今日の研修に参加して良かったと思いますか？	<input type="button" value="YES"/>	<input type="button" value="NO"/>
② 学社融合をぜひ実践したいと思いますか？	<input type="button" value="YES"/>	<input type="button" value="NO"/>
③ 学社融合についてさらに学びたいと思いますか？	<input type="button" value="YES"/>	<input type="button" value="NO"/>

①はどうですか。・・・ああ、なんと、優しい人がたくさんいますね。ありがとうございます。

②はどうでしょう。今日はちょっとお話しきれない部分がありましたが・・・ありがとうございます。9割以上ですね。

③はどうですか。・・・ほとんどの人が「Yes」ですね。ありがとうございます。

これからもっと勉強したいと思われた方にアドバイスです。

その1は、「はぐくみネット」の事業報告書にもう一度じっくり目を通してくださいということです。「はぐくみネット」の事業報告書からは得るものがたくさんあります。私もこのようにたくさんの方の付箋を貼ってあります。学社融合を勉強している者にとって、大変参考になるものです。

2つ目のアドバイスです。皆さんで集まり、小さな勉強会を開いてください。大阪の仲間もお手伝いします。私もお手伝いします。遠慮なく声をかけてください。

3つ目です。私が電子メールで無料配信している「融合レポート」を読んでください。

学社融合を学び、実践する仲間として、今後、皆様と交流できることを期待しながら、今日の研修を終わりにしたいと思います。

今日は、ありがとうございました。